

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「支援員の先生方の1学期の成果」

- 担任の指示の後に、もう一度確認することで、子どもが落ち着いて取り組むことができた。
→気になる子どもたちは、注意を集中させて聞く力やワーキングメモリ（聞いた情報を記憶・操作する力）に弱さがあるため、伝わっていないことが多い。注意を促してから話す、個別にも指示を出す、指示を理解しているか復唱させることは大切な支援となる。
- 4月に比べると子どもに笑顔が増えた。
→支援の最高の成果は、子どもの成長と笑顔である。
- 落ち込みそうなときは前向きになる言葉掛けをし、早く切り替えるように支援した。
→支援対象児は、失敗を過度に恐れる傾向があるため、気持ちを切り替える支援が必要になる。「こんなときもあるさ」「まーいっか」「明日があるさ」等、前向きになれるキーワードを唱えて、切替えのきっかけにする。その他に、できたとき、約束を守ったとき、頑張っているとき、遅れてもよい行動をしたときに、すぐ具体的にほめる。「もっと遊びたかったのに、よくがまんできたね」と子どもの気持ちを代弁して、苦しい気持ちを受け止めるなども有効である。
- 友達とのトラブルでカッとなったとき、その場を離れて廊下にある水筒のお茶を飲むように言葉掛けすると、クールダウンのきっかけになった。
→イライラを鎮めためには、場所・人・活動を変える必要がある。場所を変えて水を飲む他に、深呼吸する、ストレッチをする、ハンカチなどに触る、その場から離れる、別の人が言葉掛けて逸らすなどが考えられる。子どもができるクールダウンの方法を一緒に考える。
- 困ったときは、子どもが自ら助けを求めてくるので、助言や励ましの言葉を掛けたら、学習意欲が高まった。
→困ったときにヘルプサインを出せることは、必要なスキルである。ヘルプサイン出せないと、大人になってからも、ミスの報告や支援依頼ができずに苦しむ。自立とは、少ない支援で最大限の力を発揮することである。
- 気になったこと、支援の仕方でも迷ったときは、すぐ担任に話したり、相談したりしている。
→気になったこと、小さなことをそのままにしていると、それが積み重なり、大きな問題に発展する。口を開いて、心を開けば、道は開ける。
- 1学期の目標は、支援員に慣れてもらうこと、信頼関係を築くことであったが、2学期からは、直接手助けする機会を減らし、周りの友達との交流を通して一緒に成長できるように見守っていきたい。
→子どもと信頼関係を築くことが支援のスタートである。この先生と一緒に安心できる、この先生の言うことは信じられるという関係性を構築する。
→支援はするよりも減らすことが大切である。不必要な支援をしていないか、支援を減らす工夫をしているか、一人でできる状況作りを心掛けているか、常に見直す。（支援を減らす指導を積み重ねていく）



こまったときは…



とれたて直送便



「失敗を反省できる人」



「あなたの学生時代の思い出は？」と聞かれると、ほとんどの人は楽しかった出来事を話すと思います。しかし、自閉スペクトラム症の人は、一度でも不快な失敗体験をすると、いつまでも鮮明に思い出すことができるので、辛かった出来事を話すことが多いといわれています。失敗したところで止めてしまうから失敗になります。成功するまで続ければ、それが成功になります。「失敗しない人」よりも、「失敗を反省できる人」を目指しましょう。

